

ひきこもり 支えあれば絶望ない

家に閉じこもり、誰とも話したくない。札幌市手稲区の大田原守穂さん(58)は双極性障害(そううつ病)を患い、20代後半からひきこもりを何度も繰り返してきた。北海道ひきこもりの老後を支え合う連絡協議会(道ひ老連協)が8月27日に札幌市内で初めて開く集会で、大田原さんは約30年間の体験報告をする。「家族が私を支えてくれた。この経験が他の当事者や支援者の役に立ってほしい」と思いを語る。

当事者の大田原さん 来月、札幌で体験報告

大田原さんは旭川生まれで札幌育ち。両親と、きょうだい3人いる。大学の建築学科に進んだが、中退した。フリーターを経て大工になり、25歳で結婚、26歳で長男が生まれた。双極性障害と診断されたのは27歳。今まで、ほぼ4年ごとになつて外に出られず、ベッドから起きられない。「誰ともしゃべりたくなくなり、家に閉じこもってしまう」

「命は痛みや苦しみによつて育まれる」として、自らの経験を語り、ひきこもりの老後を肯定的に振り返らない大田原さん、あ

りのままの自分を支えてくれた妻や息子、両親たちに心の底から感謝している」と話す。シンポの基調講演ではひきこもりと家族の支え、闘病の現状を語る。「人間はそれぞれ『時計(の速さ)』が違う。違いを理解した上で、周囲の支えがあれば絶望はない」とを訴えたい」と話す。集会は午後1時～3時半、かぞの2・7(札幌市中央区北之西2)で、当事者や家族、支援者、関心ある市民が対象(定員30人)。参加費は当事者以外500円。申し込み不要、当日直接会場へ。(編集委員 鈴木雅人)

中にはどこから落ちて肝臓を損傷し、現在は札幌市内で入院しながらリハビリ中だ。80代の両親は認知症。同じ年の妻は38歳で脳卒中になり、右半身にまひが残り、長くは働けない。生活保護の受け給を考えたが、フリーターの長男が2年前から自分たちを金銭面で支えてくれるようになった。今も同居する長男は、かつてアルバイトで体調を崩し「入と接したくない」と話すこともあったという。

大田原さんは詩人作家の星野富弘さん(群馬県在住)の生き方に共感している。星野

さんは中学校教師時代にクラブ指導中の事故で手足の自由を失ったが、筆を口にくわえて創作活動を続けている。

道ひ老連協は、12年間ひきこもった経験があるNPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク(札幌)理事長の田中敦さん(57)が、ひきこもり当事者や民間支援者が連携して事態を改善しようと呼び掛けて5月に発足した。7月24日に新たに「フクロリの会」(帯広)が加わり、個人参加も含めて同ネットワーク内7団体約1300人が加盟する。



8月の集会では大田原さんも含めた56、58歳の当事者らによるミニシンポジウムもある。テーマは「ひきこもりの老後」。親子後のきょうだい関係や生活維持への苦労を語り、今後の生き方を探る。

集会参加者によるグループワークも企画。ひきこもり経験者のピアスタッフが加わり「障害や疾病の診断がつきにくく、福祉制度のはさまに置かれやすいひきこもりにどう対応するか」

「互いに寄り添って生きていけることに感謝したい」と話す入院中の大田原さん

道ひ老連協の初の集会開催を告げるチラシ